
金の悪魔と金の天使

活字中毒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の悪魔と金の天使

【Nコード】

N3309V

【作者名】

活字中毒

【あらすじ】

双子の妹と一緒に死んだら、よくわからないけど双子の妹と一緒にゲームの世界に転生していて、なんか気付いたらチートで腹黒な男の娘になっていたという話。今のところ週1で更新予定です。

LV・000 『神よ、二人を頼みます』

うるさいな。

周りが騒がしい。僕は目を開けようとしたが、開かなかった。手足も思うように動かない。まるで全身麻酔を打ったようだ。打った事ないから想像だけだ。

「頑張つてね、あとちょっとだからね。かわいい私の子供達」

優しい声がして、体が少し窮屈になる。

私の子供達？という事は、転生したんだろうか。

身動きすると、温かいキスが降ってきた。

「雨水^{りゅうすい}。いい子だから泣かないでね」

どうやら僕は雨水というらしい。よくわからないが、母親らしき女の人の言う通り大人しくする事にした。

「立夏^{りつか}。目を覚まさないでね」

もう一人は立夏、か。おそらく妹だろう。なんとなくわかる。

「雨水、妹を、立夏を守ってあげて。ああ、見えてきた」

今度も兄妹か。ややこしくなくていい。

「水月様、こちらに」

テノールの男の音がする。母親はカサカサと音を立て、僕らをまた強く抱いた。

「いたぞ！こつちだ！」

「さ、お早く」

男が落ち着いて、安心させるように言う。母親が頷くのが気配でわかった。

「神よ、二人を頼みます」

震える声でかすかに呟き、僕らは硬いものの上に置かれた。気のせいでなければ、水が流れるような音がする。

「願わくは、また会えますように。しっかりと、たくましく生きて頂戴ね」

その声を最後に、僕の意識は途絶えた。

『……って感じだった』

僕は覚えている事を目覚めた妹

立夏に教えた。

『そっか。優しそうなお母さんだね』

『うん』

何があったのかはわからないが、会いに行けたらと思う。

僕らは双子だ。そして、どういいうわけか前世の記憶がある。

前世でも双子だった僕らは、全く似ていない容姿だった。どちらも十人並みだが僕はつり目で立夏はたれ目、天然の立夏と直情的な僕。身長差は三十くらいあったんじゃないかな。男女だから当然なんだけど。

僕らには前世の記憶があるが、人格などが同じというわけではないらしい。まだ生まれてすぐなのに人格があるのは変な感じがする。

それから、今話しているのは前世で言うところの念話っぽい。立夏限定なのか、他の人もできるのかは全くわからないけれど。

『でもここ、どこだろうね』

何かに乗せられて川を下ったのは確かだ。流れは結構速くて、途中でひっくり返ったりしなかったのが奇跡だと思う。滝がなかったのは幸いだ。

『川の下流……としかわからないな。目も開かないし、音だけじゃわからない』

どこかに引っかかって止まったようだ。目も開かないって事は本当に生まれてすぐなんだろう。そんな子供を捨てる　　いや、逃がすなんて、余程の事があるに違いない。

その後は赤ん坊の体が僕らの思考に耐えられなかったのか、意識はプツツリ途切れてしまった。

『おや、妖精の子供ではないか』

しわがれた老人の声がして、僕は目が覚めた。

『上から流されて来たのか？……む、これは』

老人が僕の服をつかんだ。服ではなく、ただの布かもしれないけど。

『雨水に立夏、か……訳ありのようじゃな』

どうやら名前が書いてあったらしい。

『ユーラン、いるか』

『はい、レソト様。どうかしましたか』

『この赤子を育ててやる事はできるか？』

『見たところ妖精のようですし、できなくはないでしょうが……おや、人間の血も混ざっているようですな』

妖精？まさかここは地球ではないのだろうか。では、なぜ言葉がわかるのだろうか。

『ハーフですか……妖精と人間の特徴をどのように受け継いでいるかによりますね。ですがまあ、何とかしてみせましょう』

色々と疑問は尽きないが、また眠気が襲ってきた。

面倒くさいな、この体！

Lv・001『この世界って、“アルヴェディア”だよね』

僕らは三歳になった。僕らを拾ってくれたレソトとユーランは精霊らしく、世の中の事は然程詳しくはなかったが、大体の事はわかった。

まず、生まれたばかりの僕や立夏に自我があった理由。それは妖精の血を引いているかららしい。

そもそも、妖精と精霊は一つの種族だった。それが長い時を経て分かれ、人間などに近い方を妖精、昔のままなのを精霊と呼ぶようになったそうだ。

だから、妖精は人間や他の種族（竜人、魔族、翼族）よりは精霊に近い。例えば、植物の声が聞こえたりとか。動物に好かれやすかったりとか。目に見えないはずの精霊が見えたりとか。ちなみに精霊に関しては、力の強い精霊は意識すれば見えるようにできるらしい。

そして、精霊は親というものがない。自然のもの　例えば道端に落ちている小さな石ころなんかに宿る。いつの間にか生まれていて、姿も一生変わらない。宿っているものが死ねば　石なら砕ければ　精霊も死ぬ。

妖精は普通に両親から生まれるが、精霊のように自我は初めからある。そのため体に負担がかかり、子供の内はほとんど寝て過ごす

のだとか。かくいう僕も、一日の三分の二は眠っている。十歳くらいになれば半分になるそうだ。

僕と立夏の念話は原因不明のままだ。精霊の話し方は頭に直接響くから、同じようなものだろう。僕らの場合はお互い限定だけど、ちよっとした先祖返りかもしれない。

そういえば、僕と立夏は生まれたばかりだったけど、食べ物はどうしたと思う？これも妖精の特徴に救われたんだ。

妖精や精霊は人間のように野菜とか肉を食べない。食べれるけど、食べても意味がないらしい。ではどうやって生きるのかというと、魔力を食べる。食べる、というよりは吸収する、という方が正しいかもしれない。

人間は生きるのに水と食糧、そして酸素を主に使うけど、僕らは魔力を使う。歩くのも、泳ぐのも、羽を使って飛ぶのも魔力を消費する。激しい動きであればあるほど。だから妖精は魔力無しでは生きられず、五つの種族の中で最も魔力が多い。妖精が魔術を得意とするのは、僕らにとって手足を動かすのと同じくらい魔術を使うという行為が自然な事だからだ。だって、同じように魔力を使うでしょう？ちなみに、精霊は宿っているものの魔力が具現化したようなものなので、魔力を食べる必要はないが引かれるらしい。

魔力を吸収する方法は三つある。一つ目は自然のものから吸収する方法。自然のものが発する魔力は純粹ですごくきれいだ。二つ目

は道具から吸収する方法。魔道具なんかは魔力がない人でも使えるように魔力を込めてあるから、いざという時は妖精の食糧となる。三つ目は他人からもらう方法。魔力がある人なら触れるだけで吸収できる。が、個人の持つ魔力は自然のように純粹ではないため相性があるとか。

幸いにも、レソト達が住んでいるリーントアの森は聖域だった。聖域とは、魔力の多い土地の事だ。あまりに濃すぎて、中心部は妖精と精霊しか入れないほどである。魔力は余るほどあった。

僕らはハーフだから魔力を吸収しないという可能性もあったんだけど、試してみたところどちらでもいけるようだ。精霊では母乳は出ないから、無理だったら人間をさらって来るところだったと笑われ、顔がひきつったのはいい思い出だ。

「雨水、気になったんだけど」

母親が使ったのと同じ言語で立夏が言った。レソトは昔妖精のふ

りをして旅をしていた事があり、その時に覚えたそう。三百年前だが、まだ通じるようで良かった。

「何？」

「この世界って、“アルヴェディア”だよな」

“アルヴェディア”っていうのは、前世で夢中になっていたVR MMORPGの事だ。

「やっぱりそう思う？」

僕も前々からもしや、と思っていた。レソトの話は地名から何から、“アルヴェディア”にそっくりだったのだ。尤も、そっくりだというだけでやはりゲームとは違うのだが。

「オリアン帝国があって、魔王と冒険者達が戦ったってアレ、“アルヴェディア”の話でしょう？HPやMPを回復する薬はさすがにもうないみたいだけど」

まあ、ファンタジーとはいえ現実あったら怖い。……いや、もしかしたら作れるかもしれないが。昔はあったのだし、三百年前の道具は高値で取引されているという話だ。

妖精の特徴についても、概ねゲームの通りだった。なら、MPは魔力と考えていいだろう。

「立夏、魔術とか覚えてる？」

「バッチリ」

「僕もだよ」

ゲーム時代は“金の悪魔”“金の天使”と呼ばれた僕達だ。容姿は若干変わっているけど、金髪は健在である。

魔術に関して右に出る者はいないと言われた実力、現実のアルヴエディアでも試してみよう。

『LV・002』そうやって考えたら、妖精ってすごく強いよね (前書き)

ある程度進んだら登場人物や設定も書こうと思います。

Lv・002『そうやって考えたら、妖精ってすごく強いよね』

さて、魔術を修得し直すに当たって、僕はレソトに魔術について聞いてみた。ゲームとは色々違うだろうしね。

レソトは妖精の子供は思考が大人と同じだったりするから、すんなりと話してくれた。

『まずは魔術の種類じゃが、黒魔術、白魔術、精霊魔術、召喚魔術、錬金術の五つがある』

これはゲームと同じだ。“アルヴェディア”では魔術を使う。魔法は魔物が使うものなので別なのだ。

『雨水と立夏は妖精の血が入っているから。魔術はどれも問題なく使えるじゃろう。特に精霊魔術と召喚魔術は得意中の得意じゃな』

精霊魔術は精霊と、召喚魔術は聖獣や神獣と契約して力を貸してもらおう魔術だ。対価として、魔力を渡す。

間違っってはならないのが“貸してもらおう”という点で、使役するなどと言う者は成功しない。妖精に適性が高く、その他の種族に低いのはその辺りの意識の違いだろう。

『黒魔術は魔族、白魔術は翼族、錬金術は人間が得意じゃが、妖精と大して変わらんよ』

そう。妖精は魔術に関してかなりチートなのだ。魔術攻撃力、魔術防御力共にかなり高い。その代わり物理攻撃力と物理防御力が翼族の次に低く、レベルアップに他の種族の五倍ほどかかったりする。

MP＝HPで、MPが減るとHPも減るくせに（逆もしかり）HP回復薬が全く効かないのもネックだ。MP回復アイテムはなかなか手に入らないし、高価である。MPを他人に渡すような物好きがいるはずもなく、自然のものから吸収するなんて設定はなかった。だから、初めに妖精にしていた者も他の種族に変えていったのだ。

一部を除いて。

「竜人はどうなの？」

ある程度答えは予想しているが、立夏が聞いた。

「竜人は魔力を上手く使えないのじゃ。魔力があっても魔術は使えない」

やはりそうか。

しかし、竜人は物理攻撃力、物理防御力がダントツでトップである。ゲーム時代の僕や立夏が同じレベルの竜人の攻撃を食らえば、一発で死ぬだろう。

「魔術は基本呪文を詠唱するが、錬金術だけは別じゃ。錬金術は主に日常生活の中で活用する術で、薬品の調合や鍛冶、魔道具の作成

などに使用する。それから詠唱カットや無詠唱もあるのじゃが、妖精でもかなり難しいの』

詠唱カットと無詠唱はなかった。時間短縮になるし、できたら面白いかもしれない。

『あと、三百年前の魔術は古代魔術と呼ばれておる』

「古代魔術？」

『うむ。昔の魔術は今よりも威力が高かったからの。忘れられた魔術はほとんどがそういうものじゃ』

ゲームでいうところの上級魔術だろうか。確かに、現実で使えば街どころか国が半壊しかねないと思う。滅多な事で使うのは良くないかもな。ゲームみたいに味方を避けたりしてくれないだろうし。

「じゃあ妖精は魔術しかできないの？」

『そんな事はありませんよ』

横で聞いていたユーランが言った。

『確かに妖精は魔術が得意で肉体戦は苦手ですが、そんなものは本人の努力次第でどうにでもなるでしょう』

つまり、魔法じゃないけど魔法剣士みたいなのも夢じゃないと。

『まあ、竜人のようになるのは無理ですが。弓やナイフ、あとは刀や鎌なんかは使えるんじゃないですかね』

「戦闘に使う鎌って大きくない？」

妖精に重いものを振り回す力があるとは思えないんだけど。

『大きいですが、あれは遠心力を利用して振り回すんです。力はあまり関係ありません』

なるほど。立夏は弓で決定かな。前世で弓道やってたし、東洋の弓とは違うだろうけど素人よりはマシだ。

『そうそう。魔術師でしたら、杖を使った棒術を習っておくのも良いのでは？』

ああ、そういうのもあるのか。二人に聞いて良かった。

ゲームの世界では装備品が限られたり、一定以上能力値が上がらなかつたりしたけど、ここでは何とかかなりそうだ。妖精の弱点もある程度カバーできるに違いない……これってチートじゃ？

「そうやって考えたら、妖精ってすごく強いよね」

同じ事を考えたらしい立夏が言った。

『そうですね。特にあなた方は両親の能力を良いとこ取りした存在ですから』

食べ物的事とかね。飢える事はまずないと思う。

『ただ、妖精は数が少ないですよ。妖精狩りがありますから』

「妖精狩り？」

『妖精の羽は綺麗でしょう？羽だけじゃなく、容姿も端麗ですし。高く売れるんですよ』

うわぁ。何て恐ろしい。

『捕縛の方法なんていくらでもあります。魔術を使えなくする魔道具とかね』

だから体術もきちんとやりましょうね、と言うユーランに、僕らは真っ青になって頷いた。

『Lv・003』良い面と悪い面は背中合わせなんだね』

そんなこんなで魔術と体術の訓練を受けました。

といっても、体術は基礎の基礎だけ。体作りって感じかな。まだ三歳だし、普通の妖精は勉強なんだから。でも、レソトやユーランが教えられる事は少ない。数百年森から出てないしね。昔のレソトのように旅をしている妖精か精霊が通りかかったら教えてもらう事にした。

聖域の中心部って安全なんだけど、その周りには強い魔物ゲームで言うところのモンスターがうじゃうじゃいるらしい。なのである程度戦えるようになるまで出られない。実戦経験をつむにはもってこいだけだね。

つまり、ここに来るとしたらかなり強い人になる。聖域は妖精や精霊にとって安らぎの場所だから、それなりに出入りはあるらしいし、今から楽しみだ。

五歳になりました。

魔術は面白いぐらいにどんどん吸収したよ。元々知っていたつてもあるんだけど、やっぱり妖精はチートだ。ゲームとは比べ物にならない。限界がないからね。自惚れじゃなく、そこらの宮廷魔術師より強いんじゃないかな。実戦経験もあるし。

もちろん、五歳でもう実戦をしたわけじゃないよ。ゲームでの話

たかがゲームだって侮っちゃあいけない。“アルヴェディア”はよりリアルにするために、“現実度”っていうものがある。

現実度は五段階。一は痛みはないし、見た目怪我もしない。どころか、服が汚れたりしわになったりもしないのだ。逆に、五は現実そのもの。怪我したら痛いし、装備品はボロボロになるし、殺したモンスターが消えるなんて事はない。討伐を証明する部位も自分にとるのだ。一のように落ちていたりしない。

何より、“アルヴェディア”には盗賊などもいた。生々しい肉の感触は、日本人にとって衝撃だっただろう。当然五は危険だという事で、経営側が許可した者しか選択できないようになっていた。

僕は発売当日から参加している古参のプレイヤーで、妖精を使い続けた変わり者だった。あちらこちらでコネを作り、コツコツとレベル上げをした結果が魔術チート。古参だから珍しいアイテムもたくさん持っているし、滅多な事では死なない。現実度は四で、華々しく活躍した。

転生する二年前だろうか。現実度を五にする許可が出て、僕は

いつものようにプレイした。弱いモンスターから慣らすように狩ったけど、吐き気や罪悪感は半端ない。ましてや、ノンプレイヤーとはいえ人間を殺した時は……。

人間とは慣れる生き物で、半年もすれば平気になった。PKとかもあつたけど、吐かなくなった。現実度を下げなかったのは意地なのかもしれない。

勘違いしないで欲しいのは、決して殺しを何とも思わないわけではないという事。できるなら殺さないし、殺しても相手に対する礼節を忘れなかった。“アルヴェディア”をゲームではなく、もう一つの現実として扱った。

それが、僕らなりの覚悟だった。

体術に関しては、まだまだ基礎だけ。一通りの型は習ったけどね。こっちは全くの初心者だから。

それに、僕らはまだ一日の三分の二を寝て過ごさなければならぬ。大人になっても他の種族よりたくさん寝るっていうし、そこは人間に似てほしかったな。

でも、そうすると自我ができるのは大分遅いから、魔術や体術の訓練はできなかつた。良い面と悪い面は背中合わせなんだね。

魔術を教えてくれたのはレソト、体術はユーランだ。護身術程度

ですけどね、なんて言ってたけど、どう見ても護身術の域を超えている。相手の力を利用するものらしいから、僕らでも十分使えるんだ。せっかくだからユーランと同じくらいにはなりたいと思う。男としてはね。

それから、もうちょっとしたら他の精霊にも訓練をつけてもらおうって事になっている。それぞれの得意分野で。

僕らはレソトとユーラン以外の精霊に会った事がないから、他にもこの森にいるって事に驚いた。なんでも、近づかないように言っていたらしい。小さい内は見境なく食べるかもしれないから。精霊って魔力の塊だし。

まあ、僕らの場合、魔力じゃないと生きていけないってわけじゃないから、魔力を吸収する本能みたいなのは弱いらしい。ひどい人は二割くらい減っただけでおなかですくんだって。僕らはわからないけど、八割も減れば間違いなくおなかですくだろうって話だ。

あ、二人以外の精霊を見ないって言っても、実体を持たない低位精霊は別だ。彼らは小さな光の玉に見えてすごく綺麗だ。自我はあるけど、話せない。残念。

Lv・004『それで、どうしようか。アレ』

「おお、何と素晴らしい魔力！このニニアスの木から発せられる魔力の純粹さは私が見た中でも最高だ！ぜひとも研究を……」

どうしよう。何か変な人がいる。

『あの人頭おかしいよ、雨水』

立夏が念話で伝えて来た。この子、思った事を率直に言うから天然の毒舌なんだよ。本人気付いてないけど、結構グサツてくる事をさらっと言っし。

『立夏、ああいう人と関わっちゃダメだよ』

何かすごく疲れそうな感じがする。無視するのが一番だ。

リーンテアの森の中心部に来たんだから相当な使い手なんだろうけど、あんな人は嫌だ。何と言うか、魔力馬鹿？僕ら妖精には魔力が見えるから妖精か精霊かはすぐわかるんだけど、確認するまでもない。妖精だ。

『あの人羽、透明だね』

立夏が言った。

そう、彼は羽を出していたのである。妖精は羽を狙われるし、羽自体あんまり丈夫じゃないからしまっておくのが普通なのに。

『聖域の中心部だし、たまには羽を伸ばしたいんじゃない？』

『あ、すごい。虹色にも見える。シャボン玉みたい』

立夏は身を乗り出すようにして見入った。

ちなみに、僕は濡羽色、立夏は乳白色をしている。レソト達曰く珍しい色で、妖精狩りの人達に見つかったら全力で逃げないとヤバイらしい。

というか、もしかして透明も相当珍しいんじゃない？

僕らは数分前まで、ニニアスの木にもたれかかって昼寝をしていた。

ニニアスの木っていうのは御神木みたいなもので、大量の魔力を発している。地面とか他の木からも出てるんだけど、全く比べ物にならない。ニニアスの木があるからここは聖域なんだ。

精霊は自然のものに宿るけど、レソトはニニアスの木に宿る皇位精霊だ。皇位つてのは精霊の力の強さを表す位みたいなので、上から皇位、高位、中位、低位になる。つまり、一番強いのだ。そして、ユーランは高位精霊である。宿っているものはマニの木、だったかな。

おおっと、話がずれた。閑話休題。

そしたら、反対側にあの男が来た。見た目は二十代くらいだけど、妖精は長寿らしいから当てにはならない。髪は紺色で、ストリート。背中の中頃まである。目は残念ながら見る事ができないが、相当整った容姿のようだ。

妖精が容姿端麗な種族だって本当だったんだね。っていうか、こういう転生パターンでは見る人皆美形つてのが王道な気がするんだけど。あ、でもレソトはおじいちゃんだし、ユーランは十人な……殺気を感じるからやめておこう。

『それで、どうしようか。アレ』

運の悪い事に、レソトもユーランもこの場にいない。寝てたからどこに行っているのかわからないけど、いないものは仕方ないな。

『あの羽は興味あるけど、放っておくのが一番なんじゃあ……？』

『でも、数日居座りそうだよな』

数日どころか数ヶ月とか普通にいそうだ。妖精は聖域では食べ物に困らないし。聞いた話では、聖域に住んでいる人達もいるらしい。三百年前だけだ。

『変な人には捕まりたくないな……うわっ』

目の前に金色の目があつて飛び上がりそうになった。うわ、金の目とかファンタジーだなあ。

僕らは魔術師だし、体術とかに関しては修行中だから気配には疎い。でも、それにしたって普通の人よりはわかるはずんだけど、全くしなかったよ。この人。

「おや？こんなところに子供がいる。この辺りに町や村があるって話は聞いた事がないんだが」

そりゃあ、町や村に住んでるわけじゃないしね。

「それにしても、見事な金髪。新緑色の瞳も、翼族のように真っ白な肌も素晴らしいじゃないか。見た感じまだ五歳前後かな？かわいらしい姉妹だな！」

「僕は男んだけどねえ……」

笑顔で、少々低めの声を出して言った。ユーランにもかわいい、かわいって言われるけど、男としてはうれしくないんだよ。確かに僕の容姿は天使だけどさ！

あ、言うておくけどナルシストじゃないからね。僕と立夏は髪の長さ以外本当にそっくりだから、僕の容姿をけなすと立夏の容姿もなす事になる。それが嫌なだけだ。

だからといって、女の子みたいな扱いをされるのは非常に不本意なんだ。あくまでも僕は男だし。

「男の娘！美少女兄妹！さわっていいか！？」

男が鼻息荒く、手をワキワキさせながら近寄って来た。

うん、なんか色々残念だな。この人。せつかく整った容姿なのに、宝の持ち腐れってやつだ。……いや、これで美形じゃなかったら本当にただの変態か。

『うわぁ……………』

立夏が本気で引いている。優しい子だから、こんな事滅多にしないのに。よっぽど怖かったんだな。よし。

【駆け抜ける風よ、我に従え セルーション】

男には空を舞ってもらおう事にした。

LV・005『ラ・バト、さん?』

変人はラバトという名前らしい。名乗ってきたから、仕方なく名乗り返した。

僕はラバトを中心部の外へ放り出したのに、無傷で帰って来た。こんなんでも強いみたいだ。一人で中心部に来るだけの事はある。

「それで、お前達はなぜこんなところにいるんだ?」

「んゝまあ、ちょっと訳アリだね。ここの精霊に育ててもらったんだよ」

自我があるから手はそれほどかからなかったと思うけど。

「精霊に?それはめずらしいな。妖精の子供は精霊にとって危険なんだが」

食べるからね。

「む?.....ああ、ハーフなのか。ならそういう欲求が弱いか異常に強いかのどちらかだな。お前らは弱かったというわけか」

強い場合もあるんだ。人間の血が混ざったせいで妖精としての能力を制御できないとか?とことんついてるんだなあ。僕らって。

「精霊に育てられた金髪幼女の双子.....」

「ラ・バ・ト、さん？」

「はいいいっ！」

なんかこの人、普通にしていたらモテるだろうになあ。時々脱線してしまふみたいだ。それ以外はまともなのに。

「魔術も精霊に？」

にやけてた顔を元に戻し、ラバトが言う。

「うん。一般常識とかはあんまりわからないみたいだったからね。その代わりちよつと早いけどって」

「ちよつとどころじゃないけどな。普通は十歳過ぎてから習い始めるぞ」

へえ、そうなんだ。

「じゃあ、十歳まですごく危険なんじゃないの？」

立夏が尋ねる。主に狩人とか狩人とか狩人とか。

「ああ。確かに、子供が一番狙われやすいな。でも、体ができてないから十歳前に魔術を使える奴は少ない。練習しても意味がないな」

やっぱりチートだな。この体。うん。

「それでねー、私達、この世界の事全く知らないんだ。教えてくれると助かるんだけど」

この人に頼むのか、立夏。まあ、暴走しなければいい人みたいだけど。僕を女の子扱いしたり、男の娘って言ったりするのはいたさないな。

一般常識って知ってて当たり前だから、ラバトは何から話していかかわからないようだった。それなら、と僕らが質問すると、淀みなく答える。きっと頭が良いんだろう。

この世界はアルヴェディアっていう名前らしい。ゲームのまままだ精霊はその辺り全く気にしてなかったから、知らなかったんだよね。

大陸に国は五つ。北のカンド王国、西のフレッシュア王国、南のインニス王国、東のユリール王国、中央のエフェソス王国。三百年前にあったオリアン帝国が分裂したようだ。リーンテアの森はフレッシュア王国の東寄りの場所にある。

それから、ずっと気になっていた名前の事も聞いてみた。僕の名前って明らかに日本っぽいよね。レソトとかはカタカナなのに。

すると、僕らのような名前は珍しくないという答えが返ってきた。昔からいるにはいたが小数で、三百年前に増えたとか。

……もしかして、もしかしなくてもプレイヤーだよな。ほら、カタカナ使う人とそうじゃない人がいるし。

あと、アルヴェディアの名前は貴族や商人の場合、『名前・家名』になるようだ。平民の場合は『名前・住んでいる土地名』で、王家は『名前・王族でない方の親の家名・国名』となる。両方の親が王家の場合『名前・嫁（婿養子）に来た方の国名・国名』になるのかな。

「じゃあ私はどうなるの？」

「本名は別にあるだろうが、名乗るなら『リツカ・リーントア』になるな」

そうそう。漢字の名前は正しく発音できる人とできない人がいるらしい。名前が漢字の人は大抵ご先祖様が漢字だったとかで、普通に発音できる。が、カタカナの人はできない人が多い。その“ご先祖様”がプレイヤーなのかそうでないのかも確かめたいところだ。

地理の話に戻るけど、リーントアの森から一番近いのはルルスっていう村だ。森を出てから歩いて十日ぐらい。まあ、魔物の多い領域の近くに住もうとする人なんて妖精ぐらいのものだからね。

ルルス村は南側にあるけど、北に十三日歩いたところにはトリアナという町がある。そんなに大きくはないが、活気のある町らしい。西側のマッシュューブへは二十日歩かなければならず、馬か何かがあった方がいいとの事。とても大きな街だそうだ。

東側には何もなし。騎馬民族や遊牧民なんかが行ったり来たりして、エフェソス王国との国境には小さな山がある。山と山の間を川が通っており、リーントアの森の川とつながっているらしいが、

僕らがエフェソス王国出身だと断言はできなさそうだ。この川はた
くさんの川の水が集まっていて、リーンテアの森の北側にもつなが
っている川がいくつかある。つまり、フレシア王国出身という可能
性もあるわけだ。

いずれ生き別れた母親を探す時は、フレシア王国とエフェソス王
国を中心に探す事になるのかな。

Lv・006 『俺ら妖精は数が少ない』

アルヴェディアには五つの種族が存在する。国も五つあるけど、一つの種族に一つの国というわけではない。人間があまりに多すぎるからだ。大陸の人口の約六割から七割が人間らしい。王家も、北のカンルド王国以外全て人間だとか。

だからといって、人間ばかりが偉そうにふんぞり返っているわけでもない。一部の頭の残念な貴族はそうかもしれないが、平民達はフレンドリーだし、人間でない種族には冒険者が多いから商人も友好的だ。冒険者は命のやりとりをする分収入が良いからね。商人にとっては大切な客なのだ。

頭の出来が良い上の連中は、人間以外の種族に反乱でも起こされたらまずいとわかってるので、きちんと人権を認めている。何て言ったらって、一番弱いのは人間なんだから。数は圧倒的に多いが、そのせいで他の種族のような同族意識がなく、まとまらない。欲が深いから保身に走る。魔道具を作るのは一番上手いが、たとえ勝てたとしてもかなりの痛手になる事は必須だ。

そういうわけで、一部の馬鹿と闇商人以外は差別や人身売買なんてしない。何せ、どの国でも法律で禁止されているからね。妖精狩りなんてのも違法なんだよ。なくならないけど。

さて、それぞれの種族の特徴だけど、人間は大体地球と同じ。違うのは目がチカチカするぐらい髪や目の色がカラフルな事。あとは、

背が高いらしい。成人した男の平均身長が百八十後半。女は百七十の中頃だ。寿命は八十くらい。魔術があるからかな。

竜人は基本人間と同じ姿。でも、竜の姿にもなれる。モンスター
のドラゴンと違って魔法は使えないけど、身体能力が半端なく高い。
たぶん建物なんて拳一つで壊せるんじゃないかな。生まれてから何
よりも先に力の加減の仕方を習うそうだ。それから魔術が使えなく
ても、ブレスは使えるようだ。ただし、人型の時は威力が弱まる。
竜体の時の大きさとモテるモテないが決まるとか。戦う時にしつぽ
だけ出す時もあるが、邪魔になるので基本はしまっている。髪の色
は必ず原色で、鱗の色と同じだ。瞳は金。それ以外はないらしい。
竜人の男は基本がっちりした体つきで、身長は百九十から二百三十
くらい。女はスタイルの良い人が多くて、身長は百八十から二百く
らい。

魔族は背中にコウモリのような羽がある種族だ。色は黒、紫、赤
などがある。どれも暗い色だ。羽は飛ぶ時以外しまっておくのが普
通である。肌は浅黒く、耳は尖っている。髪の色は白っぽいものが
多く、瞳は赤、紫、金など。黒魔術が得意で魔術攻撃力もあるが、
妖精ほどではない。物理攻撃力も竜人の次に強いとか。人間よりや
や小柄。

翼族は鳥のような羽を持つ種族で、色は白系の薄い色だ。魔族と
同じように、基本はしまっている。真珠のように白い肌、やはり
尖った耳。髪は金髪や薄いピンク、水色など。瞳は大抵が青、緑、
橙。妖精ほどではないが白魔術に秀で、回復や補助の魔術が得意。
魔術防御力は非常に強いが攻撃力が皆無。完全に後方支援系。攻撃
の術は持たないが、鉄壁の防御を誇る。身長は魔族と同じかそれよ
り小柄。

妖精は前にも聞いた通り、魔術に特化した種族だ。ゆえに、弱点は竜人。逆もまた然りである。耳が尖っていて、髪や瞳は何色でもありうる。僕らは肌も白いから、妖精か精霊でないと翼族と間違えるだろうとの事。

妖精の弱点はもう一つあって、それは羽であった。ゲームの設定ではなかった事だけど、妖精は自己回復力がすごい。小さな切り傷ぐらいだと一秒も経たずに治ってしまう。それは吸収した魔力を羽に溜め込んでいるからで、その魔力を使って体が勝手に治している。だから魔力は消費されてしまっただけ。

妖精は魔力を体と羽に分けて保存している。普段使うのは体の方だし、こっちが減ると羽の方がいっぱいでもおなかが減る。羽の魔力は自分が怪我をした時や、緊急用だ。そのため、羽がなくなれば自己治癒もなく、魔力は半分になってしまう。魔力の減った量とは即ちおなかのすいた量で、魔力が底をつきると餓死してしまうのだ。妖精は生きるだけで魔力を消費するため、羽のない妖精は死亡率が格段に上がる。妖精の数が減った最大の理由であった。

「最近は何を食したまま捉える場合が多いがな」

「どうして？」

「体と羽を離すと、魔力が少しずつ抜けていくんだ。そのせいで、羽はだんだんくすんでいく。それなら見目麗しい妖精を鑑賞用として飼っておく方がいいだろう？」

立夏がぶるつと震えた。

おそらくそうなった場合、妖精は自由を失うだろう。魔力は与えられるし、生きてゆくのに不自由はないだろうが、心が死んでしま
いそうだ。

「今もそういう子がいるの？」

「ああ。大抵が有力貴族だから、助けようなんて奴はいないだろう
しな。俺ら妖精は数が少ない」

今は散らばっている同族を見つけるのも難しいのだそうだ。

「もし助けるって話が出たら、お前らも手伝ってくれ」

そう言うラバトの目は、別人かと思うほど真剣だった。

『Lv・007』ずっとやっててつかなくたら回むよ

妖精って色々複雑な立場にいるみたいだ。強いのに、いや、強いからこそ狙われる。美しく強い妖精を自分のペットのように扱って、さぞかし気分がいい事だろう。

それから、レソトとユーランが帰って来る前にラバトは出て行った。何か用事があったらしく、ここに寄ったのはついだったようだ。ニアスの木を見て名残惜しそうにしていたから、また来るだろう。その時に視線を感じたのは気のせいに違いない。

まさか、シヨタではないよね。“幼女”って言ってたし。……それはそれで嫌だけど。

初めてラバトが来た日から三年が経った。その間、ラバトは何度か来ている。ユーランと意気投合したようで、時々ユーランの言動

が怪しくなるのは勘弁してほしい。

八歳になった僕らだけど、二年前から少しずつ訓練を強化している。立夏は弓術と棒術、僕は鎌を使った戦闘法と暗器の扱いについてだ。立夏にはフィジー、僕にはサモアとナウルが指導してくれている。

フィジーは見た目十五歳くらいで、おっとりした少女だ。立夏とは友達みたいな関係だが、訓練は結構厳しいらしい。サモアは無口な青年で、あまりしゃべらないものの教え方が物凄く上手い。ナウルの方はおしゃべりで胡散臭い感じだ。聞くと、二人は腐れ縁らしい。三人共高位精霊である。

訓練は地味でしんどいだけだから割愛しよう。ナウルが暗器の扱いだけでなく暗殺術まで仕込んできたのは余談である。

『おー、大分体力ついてきたな』

「ずっとやっててつかなくなったら凹むよ」

僕は投げたナイフを回収しながら言った。

今、僕は中心部の外に出て実戦訓練中である。せっかく強い魔物がいるのだから、と一年くらい前から始めている。サモアとナウルがいるし、いざとなったら魔術もあるから危険はない。

初めの内は、鎌を振り回せる場所に魔物を誘導して森の中を走り回ったり、錯乱しつつナイフを投げたりするので体力がもたなかつ

た。それなりに鍛えていたんだけど、やっぱり実戦は違う。それに、魔術の時とは異なる肉を切る感触が何とも言えない気分させた。

僕が鎌と暗器、立夏が弓と棒術を習っているのには、きちんとした理由がある。

まず、これから先立夏と旅するのならどちらかが前衛をしなければならぬ。仲間ができるかもしれないが、“かもしれない”を当てにするのは最良とは言えないのだ。だから僕が鎌、立夏が棒術を習った。

妖精が扱える前衛の武器は鎌、棒、刀、片手剣……あとは使い方によってはナイフくらいだろう。刀にも魅力を感じたが、鎌の方が相手との距離を保つ事ができるし、魔術と組み合わせやすいのではないかと思った。詠唱カットはできるようになったしね。

立夏の方は、魔術の補助に杖を使う事を想定した上での選択だろう。杖を持っていると、勝手に接近戦が苦手だと勘違いしてくれるという利点もあるとか。

弓は立夏が弓道をやっていたからだけど、暗器は鎌とは反対に障害物の多い場所でも戦えるように選んだ。鎌で戦えなくなった場合も、一見何も持っていないように見えると油断するしね。

暗殺術に関してはナウルがやった方がいいって言った。何でも、才能があるらしい。素早さはあるし、この年にしては小柄だし（これからどうなるかはわからないけど）、何より性格が。

失礼だと思わない？見た目に反して真つ白な性格じゃないのは自覚してるけどさ。ああ、この外見もいいんだって。相手が侮るから大きくなったら男らしくなるかもしれないのにねえ？

……嘘だよ。希望を込めて言ってみただけ。仮に女っぽくなくなつたとしても、強そうには見えないんだろうな。それに妖精って成長止まるし。個人差があるけど、できるだけ遅くがいいな。最低立夏と同じか年上が……兄としてそれぐらいは望んでもいいよね。

そういえば、僕の容姿についてちゃんと説明した事はなかったよね。鏡がないから僕自身ちゃんと見た事がないんだけど、男女の双子なのに立夏と瓜二つらしい。

立夏はふわふわした金髪に新緑のくりくりした瞳をしている。まつ毛がすごく長くて、顔が小さい。翼族でもないのに肌は透き通るように白く、きめ細やかだ。まだ子供なのに手足がスラツとしていて、綺麗というよりは可愛い系。僕と同じくこの年にしては小柄な方だ。

というか、髪長さ以外身長も同じなのだから、正直複雑だった。立夏は腰辺りまで伸ばしていて、大抵邪魔だからとポニーテールにしている。僕は肩より少し長いくらいで、下の方で一つにまとめていた。

もつね、これでも結構鍛えているわけなんだよ。なのに見た目に全く変化がないってどういう事だろう。

いや、この顔でミスチヨになっても困るけど。

LV・008 『立夏がカレー作るって』

『雨水、聞こえる？』

立夏の声が頭に響く。

『どうしたの？何か用？』

僕は仕留めた鳥型の魔物の血抜きをしながら返した。真っ青な羽に黄色とオレンジのまざった尾を持つ、鷲サイズの鳥だ。名はユークエンという。アルヴェディアでは魔物も食料らしく、ラバトの話では普通に食べるとか。そもそも、魔物が強すぎて野生の動物は全滅。家畜ぐらいしか残っていない。

『あのね、カレーのルーみたいな味がする木の実を見つけたんだけど、今日カレーとかどうかな？』

『丁度いい。ユークエンを仕留めたから、チキンカレーにしない？』

『いいね、それ！じゃあ、準備しとくね』

魔物という生き物において、“大きい＝強い”という方程式は成り立たない。強い魔物ほど魔法を操るからだ。この魔法というものは魔術とは全く違う。まず、当然の事ながら詠唱の必要がない。魔法陣も必要ない。その魔物の“意思”一つで簡単に発動してしまう。それが魔法だ。ある意味、妖精や精霊の魔術は魔法に近い。

魔物が使う魔法は、一匹につき一属性だけである。例えばユークエンのような鳥型の魔物は風系が多い。たった一属性ではあるが、ランクの高い魔物の魔法は侮れない。ドラゴンなどであれば、国一つ滅びかねないほどの威力を誇るのだ。

ランクは下からE、D、C、B、A、S、SSとなる。ちなみに古代種のドラゴンはSSでユークエンはAだ。基本的に魔物は、体の色が派手なほど強い。もちろん例外はあるが、そう考えてまず間違いないだろう。

『どづかしたのか？』

「ん〜？立夏がカレー作るって」

『かれー？何だそれ』

「辛くておいしい食べ物」

前世の話はしていないので、詳しくは話せない。

『食べ物か？前の“さんどいっち”も旨かったよな！』

森の中では作れる料理などしているが、ラバトが時々持って来てくれるパンなどの食材はありがたく使わせてもらっている。いくら食べる必要がなくても、前世の記憶がある僕らとしては物足りない感じがするのだ。精霊達も食べられないというわけではないため、一週間に三日ほどは作るようになっていた。

「ナウルは食べるの好きだね」

『いや、オレが好きなのは食べることじゃなく立夏が作っ……………』

「食[…]べるのが好きなんだよね？」

『……はい。そうですね』

ナウルのテンションが一気に下がった気がするけど気にしない。

「サモアも食べるよね？」

『俺は別に……………』

「立夏が作ってくれるんだから、食べるよね？」

『……………わかった』

え、黒いって？何の冗談かな？

ユークエンは意外とおいしい。色が色だから最初は食べる気しなかったんだけどね。そのおいしさとランクがAって事から高級食材なんだって。

「んっまゝい！」

「立夏、確かにおいしいけどスプーンを振り回すのはダメだよ」

器は木をくりぬいたものだが、スプーンは金属製だ。砂鉄が手に入ったから、コツコツ集めて錬金した。普通の鉄がないのは森だから仕方がない。

『これがカレーか！？すつげーいい匂いするじゃないか。……野菜は余計だが』

「残しちゃダメだよ？」

『わ、わかってる！立夏が作ったものを残すものか』

『しかし、本当においしいですね。辛さを控えれば子供でも食べられそうなの……』

「あ、わかる？年齢に関係なく人気のある食べ物なんだよ」

『ふむ、確かに食べやすいな』

森から一步も出た事がないはずの僕らがなぜこんな料理を知っているのかとか、疑問はあるだろうに聞いてこない彼らにはすごく感謝している。

『ウスイヤリツカが作ったご飯はおいしいわよね』

「本当？フィジーありがとう！」

僕は微笑ましげにしつつ、ほわわんとしたフィジーが弓の名手で棒術までマスターしているなんて外見だけでは想像できないな、と思っていた。

「サモアは？おいしいでしょ」

『あぁ』

『旨いぞ！いくらでも食べられそうだ』

「ナウルには聞いてないけどね」

『雨水がいじめる……』

「ええ〜？いじめたつもりはないんだけどなあ。サモアは聞かなくて言わないけど、ナウルはうるさいくらいにしゃべるでしょ？」

『う、うるさくて悪かったな！』

ナウルがわめいているが、事実なのだから仕方がない。放っておけば空気になりかねないサモアにしゃべらせるのは大切だ。存在感がないってわけじゃあないんだけどね。

『大体ウスイは……』

「はいはい、しゃべってばかりいないでちゃんと食べてね」

絶妙なタイミングで立夏が言い、僕は内心でにやりと笑う。さすが僕の妹。わかってる！

Lv・009 『成人っていつなの？』

時は流れて、僕らは十二歳になった。十歳を超えたわけだけど、僕らの睡眠時間は半日以上だ。どうやら、前世の記憶がある事が原因らしい。

その日、久しぶりにラバトが来ていた。ここ数年は遠くを旅していたらしく、会う事はなかったのだ。妖精は滅多にいないらしいし、いてもわざわざ危険を冒してまで旅をする人なんてなかなかいない。精霊も、基本的には宿っているものの側から動かないそうだ。

「元気にしてたか？相変わらずかわいいな！」

「うるさいよ、ラバト」

僕は眉間にしわを寄せる。

「かわいいものをかわいいと言って何が悪い。美しいものやかわいいものは正義だ」

誰か、このわけのわからないオッサン（おじいさんかもしれなが）をなんとかしてほしい。何年経っても女顔で立夏にそっくりな僕のコンプレックスを的確に刺激してくれるKYを。

「そうだ、美しいもので思い出した。お前達に土産があるんだ」

そう言って取り出したのは一本のビンだった。前世で言うビールビンより少し薄い茶色に、ピンク色のラベルが貼ってある。

「それ、お酒？」

立夏が目を輝かせて身を乗り出す。未成年で死んだため、前世でも現世でもお酒を飲んだ事はない。僕らの両親はそういう所、厳しい人だったし。

「ああ。シユカという木の实から作られている」

「……そのどこが美しいものなの？」

「シユカの花は素晴らしいぞ。真っ白な中でほんのりピンクにも見える花弁。香りもまた最高で……」

「はいはい、わかったから」

聞いておいて何だが、つまらない話を永遠と聞けるほどお人好しじゃない。

「でも、お酒飲んでいいの？まだ成人してないんじゃない？……あれ、成人っていつなの？」

立夏が首を傾げる。かわいい。かわいいが、あまり人前でそういう仕草をしてほしくないな。ラバトもしっかり見て頼めるめてるし。頭をはたいてやる。

「った！……ええと、人間なら十六からが成人だな。妖精は体の成長が止まったらだ。まあ、酒を飲む年齢は定められていないから、ぶっちゃけ生まれたてでもかまわん」

いや、それは絶対不味いけどね。その赤ちゃんの健康のために！

「そういえば、妖精の成長が止まるのってどのくらい？」

「十代後半から二十代が多いが、人それぞれだからな。もっと遅い人もたくさんいる」

個人的な希望としては二十代中頃で止まってほしいものだ。さすがにそれぐらいになれば男らしくなっているだろう。

「じゃあ成人を目安にここを出たらいいかな」

「それが妥当だろうね」

僕達としては、生き別れた母親を探したい。別れた時の様子も気になるし、前世では母親というものに縁がなかったから会ってみたいのだ。

「母親を探すのなら、レソト川を遡るのがいいのだろうか……レソト川はクレメ川やルーセア川やフレス川やら、色々集まってできた川だからな。探すのは一苦労だぞ」

ラバトが言った。十歳の時に精霊達とラバトには前世の事も母親の事も話してある。

ちなみに、レソトの名前はレソト川から取ったものらしい。

「わかってるよ。それに厄介そうだしね」

川に捨てられた時の状況を思い出して言った。どう考えてもただの貧乏な一般庶民ではないだろう。追手とか、部下か臣下らしき人物とか。

「このまま生きるっていう手もあるんだけどね。まあ、必死に探さんじゃなく、のんびり旅しつつ見つかったらラッキーみたいな感じ
で」

「そうそう。一応目的がないと面白くないし？お母さんの顔を見た
っていう気持ちもあるけど、どうしてもっていうわけじゃないか
ら」

僕達の一番大きな目的は前世のゲームで培った力がこの世界でどれだけ通用するかを確かめる事だ。皆の話からするとゲームの時代から三百年経っているようだが、妖精のように長寿な種族もいる。知り合いがいたら面白いのになあ、とも考えていた。

転生云々はともかく、ゲームの話は誰にもしていない。この世界にゲーム（遊びという意味のそれではなく）はないから、説明するのが面倒だったのだ。だから、こちらの目的は僕と立夏だけの秘密である。

「まあ、話を聞いた感じでは貴族か有力商人ってところだろうな」

ラバトの言葉に、僕は深く頷いた。もし母親に会ったら面倒事に

なる、というフラグの匂いがぶんぶんするのだ。だから会いたいという気持ちと会いたくないという気持ちがあるわけで。

ま、運が良ければ会えるでしょう、と深く考えない事にした。

L V ・ 0 0 9 『成人っていつなの？』（後書き）

セリフだけだと雨水と立夏の見分けがつかない感じがしてきた今日この頃です。

一人称以外話し方は同じですし。

外見も性格も似ている設定なので。

LV・010『今すぐ私と契約なさい』（前書き）

書き忘れていましたが、『』は精霊やドラゴンのセリフ、または念話です。

LV・010 『今すぐ私と契約なさい』

僕と立夏は十二歳になって、以前とは比べ物にならないほど強く成長した。外見は相変わらずだけど……まあ、それは置いておくとしよう。

リインタアの森にいる魔物は単独で倒せるから、割と自由に出入りしている。

と言っても、森の外に出るわけではない。出たところで何も無いのはわかっているから、世間で大人と認められるまではここにいるつもりだ。いくら強くても子供の二人旅は危険だろうし。

毎日訓練は欠かしていないけど、最近は魔物も襲って来ないからつまらない。むしろ食料として欲しい時に追いかけないといけなくて大変だ。

『雨水〜ヒマ〜』

立夏の声が飛んでくる。学ぶ事は全て学び終わったし、既にサモア達より強いからする事がないのだ。

『そう言ってもねえ』

別のところを散歩しているため見えないだろうが、僕は苦笑した。

何か面白い事はないかな、と空を見上げた時、僕はそれを見た。

念話を使う事も忘れ、思考が真っ白になる。

「なっ、あれは」

ドラゴン。

そう、ドラゴンだ。

片方はきれいな紫のドラゴンだった。太陽の光を反射してキラキラと輝く。もう片方は真っ黒で、魔力が淀んでいるように見える。

二頭のドラゴンは戦っているようだ。紫は雷、黒は水の魔法やブレスで攻撃を繰り返している。魔力量から言えば黒の方が圧倒的に多い。

「あっ」

『雨水？どうかした？』

立夏の声に答える間もなく黒のドラゴンの攻撃が紫のドラゴンに当たり、僕のすぐ側に落ちる。

『何！？今の音！』

離れた場所でも聞こえたのか、立夏が声を上げる。

『ちよつと、雨水！？』

『……大丈夫、僕は何ともないよ』

上の空で答える。

目の前のドラゴンは美しかった。そんな陳腐な言葉では表現しきれないほどに。そして、想像以上に大きかった。普通の一軒家（もちろん前世基準）より一回り小さいくらいだろうか。人間一人どころか、十人くらい軽く乗れそうだ。

ドラゴンが頭を振り、体を起こした。僕と目が合う。

『妖精……そうか、聖域でしたか』

納得するように目を細める。やはり妖精は聖域にいるというイメージなのだろうか。

『きましたよ。下がってなさい』

言葉と同時に強風が襲う。僕はとつさに魔術で風を逃がした。ドラゴンの翼によるものなので、防御魔術ではなく風魔術だ。

『ウルファ、いい加減にしなさい。貴方が暴れたってあの人は帰って来ません！』

紫のドラゴンが言うが、黒いドラゴンには聞こえていないようだ。何も言わず、襲いかかってくる。

『くっ、やはりダメですか……その妖精』

突然呼ばれて、僕は目を瞬いた。

「僕？」

『そうです。今すぐ私と契約なさい』

「は？契約？」

このドラゴンは前世で言う西洋のドラゴンのような外見といい、飛ぶ事といい、先程から連発しているブレスや魔法の威力といい、どう考えても古代種である。

ドラゴンには地竜、翼竜、古代竜があり、地竜は飛ぶ事ができない。翼竜はもつと小柄で、人三人を乗せるのがやっとだそうだ。古代竜は大きくて強く、滅多に見ない種族だとラバトから聞いている。

ドラゴンは神獣なので契約はできる。しかし、召喚術の契約は聖獣や神獣を縛るものなので、好き好んで契約する獣はいないはず。

『詳しくは後で説明します。このままではあいつに勝てません。契約する必要があるのです』

そう、契約による獣達の利点は一つ。普段抑制されている力を発揮できる事だ。術者の許可さえあれば、本来の力を解放して戦える。

事情はよくわからないが、僕は頷いた。ドラゴン、しかも古代竜と契約するような機会なんて一生に一度もないだろうし、必死なのが伝わって来る。

「わかった」

【我、雨水・リインタアは問う。汝、我の許可なく力を使用しない事を誓うか？】

【我、クロード・ア・オセク・レイクレスは雨水・リーンテアの許
可なく力を使用しない事を誓う】

【汝、我の友となる事を誓うか？】

【我、友となり僕となる事を誓う】

【以上の誓約を以て、召喚の契約と為す】

魔力の糸が僕とクロードの体に巻き付いた。クロードに見えてい
るのかはわからないが、薄く発光しているそれは聖域の魔力のよう
に美しい。

契約している間も攻撃を防ぎ続けていたクロードはもうボロボロ
である。が、僕が見上げた瞬間小さく目を見張ったように見えた。

『ウルファ、貴方を放置しておくわけにはいきません。これで終わ
りです！』

クロードが言うと同時に、辺りを閃光が包んだ

LV・010『今すぐ私と契約なさい』（後書き）

クロードの名前を少し変更しました。

LV・011『一途で馬鹿で不器用な友人でした』

『どうか、安らかに眠ってください。ウルファ

』

鱗の色が黒から青に変わったドラゴンを前に、クロードは黙祷するよつに目を伏せた。ドラゴンの体は残る事なく、少しずつ姿を消してゆく。それがクロードの魔法である事は、すぐにわかった。

『さて、まずはお礼を申し上げます。雨水様』

「そうは言っても、僕は何もしてないし。それに仮契約だしね」

僕は苦笑して答える。

『そう、それです。頼んだ者として失礼かもしれませんが、なぜ本名をおっしゃってくださらなかったのですか？』

契約は本来、本名でなければならぬ。本名を名乗らなかった場

合は仮契約となり、契約よりも聖獣や神獣の力は弱くなってしまふ。しかし誓約による縛りは強く、契約と同等かそれ以上である。

クロードが目を見張ったのは本名でない事に気付いたからだろう。それはすなわち対等に扱っていないという事で、僕がクロードを侮辱したも同然の行為なので何を言われても仕方がない。でも。

「雨水というのは本名だよ。リーンテアは仮名。捨て子だから名前がわからないんだよね」

僕や立夏は本名がわからない。だから、仮契約しかできないのだ。母親を探したい理由はこれもあった。

『そう、でしたか。すみません』

「別にかまわないよ。知らなかったんだし」

僕が本名を言わなかった事に違いはない。

『それにしても、誓約はあれだけで良かったのですか？』

「僕は友達を縛りたくはないからね。それとも、絶対服従とか言うてほしかった？」

『いいえ。ただ、変わった人だなあ、と』

立夏でも同じようにしたと思うんだけど。どこぞの欲深い人とか比べてほしくはないな。仕方なくそうする事があるかもしれないけど、基本的に同意なしでは成り立たないのが契約だから無理強いはしたくない。

あ、だからこそ変わった人だって言ったのか。クロードに断るといふ選択肢はなかったようだし。

「でもまあ、クロードも十分変わってると思うよ。自分から主従の契約をするなんて」

最後の“僕となる事を誓う”ってところだ。僕は“友となる事を誓うか”って言ったのに。

『貴方なら、と思ったんですよ。直感みたいなものです』

あー、それは裏切られたと思っただろうね。本名じゃなかったわけだし。不可抗力とはいえ、悪かったなあ。

でも、主従の契約って結局絶対服従に近いんだよね。そこまで強くないけど。僕が魔力込めて放った命令には絶対に逆らえないし。何でわざわざそんな事をしたんだろう？ドラゴンはMなのか？

とりあえず立夏に連絡して、中心部へ帰る事にした。詳しくは後で話すと言ったら、立夏は若干不機嫌になりながらも了承してくれた。

クロードはドラゴンのままだと邪魔なので、人型になった。これは古代竜特有の魔法で、地竜や翼竜には使えないのだそう。紫の髪に銀の瞳の中性的な美形で、本人曰く「せつかく妖精になるのですから、きれいな容姿の方がいいでしょう」だそうだ。これはあくまで仮の姿で、変えようと思ったらどんな姿にでもなれるとか。種族

も自由自在。ただし、実際にいる人物にはなれない。

「さっきのドラゴン何だったの？ 様子が変だったけど……」

言いたくない事かもしれないが、後で説明すると言われていたの
で聞いてみた。

「……あれは邪竜ですよ」

「邪竜？」

「ドラゴンは確かに強いですが、精神面は脆いんです。特に怒りや
悲しみの感情が強くなると暴走して、自分でも止められなくなりま
す。それが邪竜。鱗は黒くなり、魔力が淀み、力が普段の数倍にま
で跳ね上がる」

そういえば、前世の本にもドラゴンは精神面が弱いとあったよう
な気がする。まさか本当とは。

「ウルファは、愛する者を人間に殺されました。そのショックで邪
竜になり、暴れていたんです。そのままでは国の一つや二つ、軽く
滅ぼしてしまうので私が後始末を」

「人間に……」

「雨水様が人間の血を引いているからってどうこう言うつもりはな
いですよ。私が認めた人ですから。でも、人間は嫌いです。あの人
が殺されたのだから、ちゃんとした理由があるわけではなく欲望か
らだった……」

きつときちんとした理由があったって、ウルファというドラゴンは邪竜になっただろう。でも……。

「友達、だったんだね」

「ええ。想いが通じない事もわかっていたのに、ただあの人だけを想っていた一途で馬鹿で不器用な友人でした」

クロードの心が泣いているような気がして見上げ、僕の身長では届かないから頭でなく背中をポンポンと叩いた。

LV・012 『僕達の第二の家族だから』 (前書き)

あと少しでリーントアの森編が終わります。

LV・012 『僕達の第二の家族だから』

「へえ、ドラゴン？初めて見た！」

立夏は興奮した様子で目をキラキラと輝かせた。

「ね、ドラゴンの姿も見てみたいんだけど！」

「私がかまいませんが……」

クロードがこちらを見たので、僕は頷いた。立夏のためなのだから当然だ。

「では」

僕らから少し距離を置いた場所に立つと、クロードはドラゴンの姿になった。葡萄色の鱗は、いつ見ても美しい。

「うわぁ……ラバトが喜びそうだね」

いや、ドラゴンを初めて見た感想がそれなのか。まあ、僕も思ったけど。

「本当にゲームとかのドラゴンみたいな姿なんだね。面白いなあ」

「違っかったらそれはそれでビックリだけどね」

僕らの仮説ではゲームの“アルヴェディア”にそっくりな世界の三百年後なんだから。

「触ってもいい？」

『触るぐらいなら……でも、乗らないでくださいね。契約者以外は乗せたくないのです』

「それって、ドラゴンは皆そうなの？」

立夏がツルツルした鱗を恐る恐る触っているのを横目で見ながら、僕はクロードに尋ねた。

『契約済みのドラゴンはそうですね。それ以前は性格にもよります。私の場合は必要でない限り無闇矢鱈と触ってほしくないのですが、立夏さんは雨水様のご兄妹ですから、特別です』

「それなら雨水に感謝しないとねー。ドラゴンに触るとか貴重すぎる体験だよ」

満足したのか、僕の隣に戻って来ながら立夏が言った。クロードは人型に戻り、やわらかい笑みを浮かべる。

「私は雨水様に出会えて幸運でした。古代竜は契約しても力を制限されてしまったり、そもそも契約自体できない場合も多いと聞きますから」

「って事は、大体の力は出せてるの？」

「はい。八割ほどでしょうか。私達古代竜は天界では全力を出せるのですが、地上では半分も出せないようです。おそらく、きちんと契約すればほぼ百パーセント出しきれるのではないのでしょうか」

「うわあ、雨水すごいんだね」

「立夏さんも雨水様ほどではありませんが、召喚魔術師の素質があるようですよ。妖精だからではなく、個人として」

「わかるの？」

「はい。なんとなくですが。立夏さんの場合、どちらかというと精霊魔術の方が相性が良いのではないのでしょうか」

「精霊魔術かー。誰か契約してくれないかな？あ、でも仮契約はすごく失礼なんだっけ」

そう。僕はクロードの方から頼まれたんだし、その場の成り行きで契約してしたから仕方なかった。でも、こちらから持ちかけておいて仮契約しかできません、なんて「ふざけるな！」と言われても文句は言えない。それくらい、契約は重要なのだ。

ちなみに、世間一般では幻獣　魔獣や聖獣、神獣の総称　や精霊との契約は一匹までとなっている。ゲームではそんな事なかったけれども、ここではそうだ。

だけど、多分まだまだいけるよ。何とというか、感覚としか言えないんだけどわかる。古代竜だから半分近く埋まっちゃったけど、逆に言えば半分ある。

……やっぱりチートじゃない？

きつと立夏も同じような感じだろう。旅をする時は気を付けないと大変な事になりそうだ。

「相手が事情を理解して仮契約でもいいと言えば大丈夫です」

「なるほど。初めから言っておくわけね」

「というか、それならここの精霊に頼めばいいんじゃない？」

「あ、そっか」

立夏は思いつかなかったようで、マンガのようにポンと手を打った。それがおかしくて少し笑ってしまう。

「確かにレソトは皇位精霊だし、ユーランも高位精霊だよね。フィジー達は知らないけど、たぶん高位でしょ」

「そうでなければあの知性や強さの説明がつかないからね」

わかりきっている事なのでわざわざ聞きはしなかったが。

「でもねえ、あんまり契約したくないんだよね。レソト達とは」

「なぜですか？その者達なら事情も知っているのでしょ？」

「そうなんだけど、やっぱり仮契約は申し訳ないっていうか……これは他の精霊でも同じなんだけどね。あと、あの人達なら契約しなくても困っていたら飛んで来てくれそうだなあっていう妙な安心感

もあるんだよ」

「あー、わかるかも、それ」

僕も頷いた。なんだかんだ言っつて、過保護なところがあるからね。まだ森の魔物を上手く倒せなかった時、スパルタながらもついつい手を出してしまっていたのを知っている。本人達はこっそりやっているつもりだったみたいだけど。

「信頼されているんですね」

「信頼……うん、そうだね。僕達の第二の家族だから」

僕が言つと、立夏は同意するように頷いた。

『Lv・013』神竜とは、アルヴェディアの神そのものです』

長い付き合いになりそうだから、クロードにも僕らの事情について話す事にした。説明が面倒だったけど、ゲームの話まで詳しく。するとクロードは、少し考えてから口を開いた。

「雨水様と立夏さんは神竜をご存知ですか？」

「神竜？さあ？」

「まあ、そうでしょうね。地上の生き物の大半は忘れていくようですから。幻獣なら誰もが知っていますよ」

神竜、ねえ。ドラゴン的一种だろうという事はわかるが、そんな種類は聞いた事がない。

「神竜とは、アルヴェディアの神そのものです。その名の通りドラゴンの姿をしています」

「アルヴェディアの神？」

そんな話をするという事は、僕らが転生した原因を知っているのだろうか。そう尋ねると、クロードは頷いた。

「彼は金竜神と呼ばれている金のドラゴンです。神竜や古代竜は契約者などの決まった相手以外に名前を教える事はありませんので、私もきちんとは知りませんが」

「え、じゃあクロードの名前も教えない方がいいよね。人前ではどうするの?」

「知られるのはかまわないですよ。別段何かがあるわけではありませぬし。ただ、気に入った相手以外に呼ばれると我慢しがたい嫌悪感に襲われるので、命が惜しければ軽々しく呼ばない事をおすすめします。もちろん、雨水様と立夏さんはかまいませんよ」

名前を呼んだだけで死ぬ可能性がある?!?

「それで金竜神ですが、今から千年ほど前に三人の人物を貴殿方の世界から転生させました。ある事故で亡くなった人間です。あの方の気まぐれはいつもの事なので私達は気にも止めませんでした」

どんな神様なんだ。

「山下翔やましなけるという方は魔術の才能、超人的な記憶力、そして仲が良く温かい家庭ふじさきりなに生まれる事を望んでアルヴェディアへ転生しました。藤崎莉那という方はドラゴンとしての生を望み、二柱目の神竜とのおのがすひこに生まれ変わって銀竜姫と呼ばれています。そして、遠野和彦という方は生き返る事を望みました」

「そんな事できるの?」

立夏が眉を寄せて聞いた。確かに、神様でも生き返らせる事はできないとか、事情があつて無理とかいうパターンはよくある。

「はい。できます。当然の事ながら、簡単に使つてはならない力ですが」

そりゃあ、そうだろうね。

「ですから、金竜神は条件を出しました。今のままの姿でアルヴェディアへ行き、当時問題になっていた魔力枯渇を阻止する事を。金竜神は原因を知っていましたし、解決策も考えてはありましたがそれをテストにしたのです」

「魔力枯渇？もしかして英雄カズヒコ・トーノーって」

「遠野和彦さんでしょうね」

「通りで変な名前だと思った」

アルヴェディアの者なら誰でも知っている物語だ。日本っぽい名前がつけられるようになった最初の原因でもある。転生者かもなー、とは思っていたけど、裏側にそんな事があったとは。

「彼は問題の解決を見事に成し遂げ、地球で生き返りました。もちろん時間は巻き戻して。それから、向こうでアルヴェディアをモデルにしたゲームを作ったようです。金竜神が楽しみに語っていましたから、よく覚えています」

「ふえっ？“アルヴェディア”を作ったTONOって“遠野”だったんだ。ずっと“殿”だと思ってたよ」

わからなくもないけど、何で会社名に“殿”なんだよ。……：そういえば前世は天然だったな。ちなみに僕は気に止めてもいなかったみたい。

「ええ、雨水様と立夏さんがおっしゃったゲームでしょうね。そし

て、今から三百年前にゲームと同じような出来事がアルヴェディアを襲った。その時に金竜神は“ゲームの世界に行きたい”と思っ
ている方をこちらの世界に呼んだのです。問題がないように、亡くな
った方限定で」

「その人達はどうなったの？」

「三百年前、アルヴェディアにゲームのキャラクターの姿で転生し
ました。魔王戦で活躍した者、平和に暮らした者など様々です。今
も何人かは生きていますはずですよ。雨水様と立夏さんの場合、“ゲ
ームの世界に行きたい”ではなく“ゲームの世界のように魔術が使
えたらなあ”とか“ゲームの世界には行きたいけど戦争のない世界
がいいなあ”という風に思ったのではないですか？」

心当たりはある。何せ現実度を五にしていたから、戦争なんてい
うものが心底嫌だったのだ。必要があれば殺すし、ゲームの世界へ
の憧れもあったけど。

という事は、立夏とまた双子なのも前世の考えが関係しているの
かもしれない。仲はかなり良かったし。

「転生がそんな理由だったとはねー。まあ、もう死んでるんだから
どうでもいいけど」

「私達みたいな人が他にもいるかもね。雨水、探してみようよ」

「うん、面白そうだね」

旅の目的が一つ増えたな。

LV・014 『何かパートナーみたいでいいよね』（前書き）

気付いたらお気に入り登録件数が100を超えていました。

ありがとうございます！

LV・014 『何かパートナーみたいでいいよね』

僕らが転生した理由を知ったところで何かが変わるわけではないが、まあ疑問が解けて良かったと思う。ずっともやもやしているのも嫌だしね。機会なんて絶対ないと思うけど、神竜と会えたら面白いのにな。

……なんて事を考えながら立夏が入れてくれたお茶を飲んでいたら、サモア達がぶらりと遊びに来た。前に普段何をやっているか気になって尋ねたところ、大抵は森をぶらぶらするか宿っているものの中で眠っているそうだ。さっきの騒ぎで来なかったところを見ると、今日は後者だったらしい。

『うおっ！？何か変なのがいるぞ』

ナウルがクロードを見て大げさにのけぞった。フィジーは小さく首を傾げ、サモアは不思議そうな顔をしただけである。サモアの場合、わかる人にしかわからない微妙な変化だったが。

『おい、誰かつつこめよ。無視か？無視なのか？』

いつも通り騒がしいのは放っておくとして。

「サモア、フィジー、古代竜のクロードだよ。クロード、こっちは僕と立夏に戦う術を覚えてくれた精霊のサモアとフィジー」

「紫竜王と呼ばれています。事情があつて雨水様と契約しました」

クロードがにこやかに言った。頭を下げたりしない辺り、文化の違いなのか古代竜として当然の事なのか。

『まあ、そうですね。ウスイをよろしくお願いしますね』

のんびりと言ったのはフィジーだ。サモアは無言で目礼した。

『はあ！？古代竜？何でこんなところにいるんだ？しかも契約したって、ウスイは本名を知らないのに……』

「こっちのうるさいのがナウルね。話は聞き流していいから」

『オレの扱いひでえな、オイ！』

「よろしくお願いしますね」

くすくす笑いながらあいさつをするクロードに、ナウルは一瞬キョトンとした。

『……ふうん？古代竜ってのは皆偉そうなのかと思ってたが、そうでもないんだな。お前とは仲良くやれそうだ』

他の古代竜を知っているのだろうか。笑顔で差し出した手をクロードが握る。クロードって協調性があるよね。ドラゴンのイメージとは大分違うかも。敬語とか。

『それで？契約したんだっけか？コイツらは仮契約しかできないだろっに』

「ええ。あの時は止むを得なかったんです。それでもほとんどの力

を出せるのですから驚きですよ。事情があるのは聞きましたが、できればきちんと契約したいですね」

「それについては、僕も考えてたんだよ。やっぱり母親を探すしかないのかな。このままだと色々不便だろうしね。ねえ、立夏」

リスクも結構ありそうだけど。厄介事のフラグがね……。

「そうだよな。私だって契約したいし。妖精が一番得意なのは召喚魔術と精霊魔術だから」

『あら？立夏は契約したいの？』

「うん。何かパートナーみたいでいいよね。心強いし」

いつでも呼び出せるから、それは大きいんだよな。契約って。召喚魔術や精霊魔術は一応魔術なんだけど、黒魔術や白魔術とは違う。実際に魔術を使うのは自分じゃないし。戦闘の時も、契約した幻獣や精霊がいてくれると大分楽だ。

『それなら私とする？前から考えてたのよ』

「さつきも言ってたんだけどね、仮契約しかできないから申し訳ないなあ〜って」

『そんなの、別にいいじゃない。後で契約し直してくれるのでしょ
う？立夏って変な人につかまりそうだし〜』

確かに、それは僕も思ってたんだよな。

『お前が言うか?というか、お前で役に立つのか?』

「ナウル、フィジーは見た目ばやんだけど強いから」

『そうよ。見かけで判断しちゃダメでしょ』

特に精霊や妖精はそうだ。体が成長しないから。強そうに見える人が強い場合が多いらしい。まあ、既にフィジーよりも立夏の方が強いと思うんだけど、油断する事もあるだろうからいてくれた方が安心できる。

『ま、確かに。雨水、契約の事だが、オレ達もしないか?ここにいってもどうせ暇だしな』

ちらつとサモアを見ると、サモアも頷いた。どうやら心配してくれていたらしい。

「本人達が良いと言っているのですから、それでいいのではないですか?」

迷っている様子の立夏に、クロードが言った。断るのも失礼だろうしね。僕は立夏次第なんだけど。

「うん……わかった。お願いする。よろしくね、フィジー」

『ええ、よろしく』

立夏とフィジー、僕とサモアとナウルが契約して、その日は一緒に夕食を食べた。

正直サモアかナウルに立夏と契約してもらった方がいいかな、とも思ったんだけど、それは何か違う気がしてやめておいた。ナウルに頼んで立夏の護衛をしてもらう手もあるわけだし。普段は騒がしいけど、そういう事に関してはすごいからね。

こうして、更に月日は流れる。

LV・014 『何かパートナーみたいでいいよね』 (後書き)

次回から新章に入ります。

設定集？ 種族

人間

大体地球と同じ。違うのは目がチカチカするぐらい髪や目の色がカラフルな事。あとは、背が高い。成人した男の平均身長が百八十後半。女は百七十の中頃。寿命は八十ぐらい。

竜人

基本人間と同じ姿。竜の姿にもなれる。モンスターのドラゴンと違って魔術は使えないが、身体能力が半端なく高い。おそらく建物なんて拳一つで壊せる。生まれてから何よりも先に力の加減の仕方を習う。魔術が使えなくても、ブレスは使える。ただし、人型の時は威力が弱まる。竜体の時の大きさでモテるモテないが決まるとか。戦う時にしっぽだけ出す時もあるが、邪魔になるので基本はしまっている。髪の色は必ず原色で、鱗の色と同じ。瞳は金。それ以外はない。竜人の男は基本がつちりした体つきで、身長は百九十から二百三十ぐらい。女はスタイルの良い人が多くて、身長は百八十から二百ぐらい。寿命は五百歳ぐらい。

魔族

背中にコウモリのような羽がある。色は黒、紫、赤などがある。どれも暗い色。羽は飛ぶ時以外しまっておくのが普通である。肌は浅黒く、耳は尖っている。髪の色は白っぽいものが多く、瞳は赤、紫、金など。黒魔術が得意で魔術攻撃力もあるが、妖精ほどではない。物理攻撃力も竜人の次に強い。人間よりやや小柄。寿命は五百歳。

翼族

鳥のような羽を持つ種族で、色は白系の薄い色。魔族と同じように、基本はしまっている。真珠のように白い肌に、やはり尖った耳。髪は金髪や薄いピンク、水色など。瞳は大抵が青、緑、橙。妖精ほどではないが白魔術に秀で、回復や補助の魔術が得意。魔術防御力は非常に強いが攻撃力が皆無。完全に後方支援系。攻撃の術はほとんど持たないが、妖精でも安易には破れない鉄壁の防御を誇る。身長は魔族と同じかそれより小柄。寿命は五百歳。

妖精

魔術に関しては最強。尖った耳をしている。魔力を食べて生きており、基本的に温厚な性格。ただし、怒るとかなり怖い。見目麗しく寿命が長いのが特徴。魔力は体と羽に分けて保存しており、羽を失うと死亡率が格段に上がる。美しい羽や妖精自体を狙う“妖精狩り”というものがあり、狩る人を“狩人”と呼ぶ。狩られた妖精は闇商人の手によって違法に売買される。人間達より精霊に近く、生まれた時から自我がある。そのため脳に負担がかかり、十歳までは一日の三分の二、十歳からは半分寝なければならぬ。成人すると大分マシになるが、それでも必ず八時間は寝ないと身が持たない。弱点は物理攻撃力、防御力が弱い事と羽、睡眠時間。植物と話せたり動物に好かれやすかったりする。寿命は千歳。

精霊

妖精の元となった種族。普通の人（妖精以外）には見えないが、力の強い精霊は自らの意思で姿を見せる事もできる。親というものがなく、自然のもの（石や木など）に宿る。寿命は特に決まっておらず、宿っているものが死ぬ（砕けたり枯れたりする）と消滅する。

また、話す時は念話のように直接頭に響くためその人にしか聞こえない。宿っているものの魔力が具現化したものなので、魔力の塊である。そのせいで理性が利かないほどおなかをすかせた妖精や子供の妖精の前に姿を現すのは非常に危険。姿は生まれた時から一生変わらない。力の強さによって位があり、下から低位、中位、高位、皇位。宿っているものの魔力量で決まっている。低位は光のみで、自我はあるが話せない。中位も同じく話せないが、人の形をしていて意思の疎通はできる。皇位精霊は聖域の最も魔力が高いもの（リインタアの森の場合はニニアスの木）に宿る。

魔物

魔法を使う事ができる動物の総称。普通の動物は魔物によって絶滅させられた。強さをランクで分けられていて、下からE、D、C、B、A、S、SSとなるが、SとSSはほとんどいない。強い魔物ほど強力な魔法を操るので体の大きさなどは関係ない。また、あまり隠れる必要もないため強い魔物ほど派手な色をしている事が多い。

幻獣

魔獣、聖獣、神獣の総称。いずれも人の言葉を解し、精霊と同じように話す事ができる。これらは魔物と同じようにランク分けされ、下からE、D、C、B、A、S、SSとなるが、幻獣は全てBランク以上である。

魔獣

B、A、Sランクの幻獣が多い。グリフィン、フェンリルなどがこれに分類される。主に火属性や地属性、雷属性、氷属性、闇属性。

聖獣

B、A、Sランクの幻獣が多い。ユニコーン、ペガサスなどがこれに分類される。主に水属性や風属性、木属性、無属性、光属性。

神獣

S、もしくはSSランクの幻獣が多い。古代竜、フェニックスなどがこれに分類される。属性は関係なし。

ドラゴン

幻獣の一種。地竜、翼竜、古代竜とあまり知られてはいないが、神竜に分けられる（厳密に言えば神竜は別）。数え方は頭である。

地竜

ドラゴンの一種。空を飛ぶ事はできないが、魔法とブレスは使える。幻獣としての分類は魔獣。

翼竜

ドラゴンの一種。飛ぶ事はできるが、サイズが小さい。三人乗せるのがやっとの大きさ。幻獣としての分類は聖獣。

古代竜

ドラゴンの一種。一般的にはドラゴンの中で最強と言われている。各属性に一頭ずつしかいない。普段は神竜のいる異空間に住んでおり、姿を現す事はほとんどない。

神竜

アルヴェディアの神。現在は金と銀の二頭だけしかない。

邪竜

強い負の感情に支配されたドラゴンのなれの果て。鱗は黒くなり、魔力が淀み、力が普段の数倍にまで跳ね上がる。破壊衝動が強く、理性が全くない。この状態のドラゴンはSSランクの魔物に分類される。

ユークエン

鳥型の魔物。真っ青な羽に黄色とオレンジのまざった尾を持つ鷲サイズの鳥。ランクはAで、高級食材として知られている。属性は風。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3309v/>

金の悪魔と金の天使

2011年10月12日14時50分発行